

15年ぶり鳳仙寺を訪問

自作のふすま絵と対面

現代中国の伝統的な書 住職)を訪れ、15年前に 画家の一人、愛新覚羅毓 自ら描いたふすま絵と対 面した。

が8日、桐生市梅田町一 毓岫さんは清朝皇帝の 丁目の鳳仙寺(坪井良廣 流れをくむ愛新覚羅家の 父親の溥佐さんは中国

でも著名な書画家で、毓岫さんも工業美術設計を学んだ後、父親に師事し、伝統的な書画の技法を学んだ。

鳳仙寺との縁は15年前、ふすま絵の仕事を依頼されたのがきっかけ。山水を描いたスケール感のあるふすま絵は寺の本堂に納められ、訪れた人々の心を動かしてきた。

今回の訪問は15年ぶり。熊本で開かれた展示即売会の後、娘の真真さんとともに6日夜、桐生に入った毓岫さん。さっそく坪井住職らとの旧交を温めた。

自作を眺め、「今ならもっと上手に描くことができる」と感想。「日本を訪れるたびに桜が出迎えてくれる。今回も素晴らしい桜に出会えたので、中国に帰ったらぜひ桜を題材にしてみたい」とも。

毓岫さんらは8日夕方、横浜に向けて桐生を後に。坪井住職は「今後も交流を続けていければ」と話していた。



自作のふすま絵の前に立つ毓岫さん(左から2人目)と坪井住職(同3人目)